

台北縣立十三行博物館

著者	山口 卓也
雑誌名	阡陵：関西大学博物館彙報
巻	58
ページ	10-11
発行年	2009-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10112/00023941

台北縣立十三行博物館

山口卓也

はじめに

台北市の西を南北に流れる淡水川は、台湾島の北端に近いところで東シナ海に注いでいる。いまでこそ北部の貿易港は基隆港であるが、もともと東シナ海の交易は、この淡水川をさかのぼって行われてきた。右岸の淡水の町には、1629年にスペインによりサン・ドミンゴ城が築かれている。



淡水川河口左岸に残る「十三行」という地名は、船客や貨物の船積みを行う船頭行とよばれる業者が13社あったことから名付けられたという説がある。現在この左岸河口周辺は砂堆と後背湿地がいりくみ、多様な自然環境を形成しているが、ここに発見された十三行遺跡の保存と活用のため、2002年に遺跡博物館が開館している。この十三行博物館を紹介しよう。



遺跡発見

1955年、戦闘機のコンパスが淡水川口左岸の八里郷十三行庄上空で乱れることから、中央研究院歴史語言研究所などが現地を調査したところ、多数の鉄屑と砂鉄鋸床が発見され、そこが台湾史前文化期の製鉄遺跡であることが判明した。

今までの発掘によって、多数の溶鉄炉と伸展葬や屈葬の墓、住居、土器や石器、鉄器や銀器



など多数の遺構・遺物が発見され、3世紀頃の製鉄技術を持った台湾島最古の遺跡で、15世紀頃まで存続したことが解明された。歴史的には、漢族の移住以前の台湾史前文化、鉄器時代に相当する。日本に対比すると弥生時代後期から鎌倉期に相当するだろうか。生業活動は、鉄器・石器や骨角器から、活発な狩猟・漁撈文化の存在が推定されている。いまのところ導入展示には十三行人の復原がやや原始的におこなわれており、農耕活動や社会構成についての言及は少ない。出土人骨から特徴を捉えて行われる十三行人の顔面と身体の復原は、一見の価値がある。



金や銀、ガラスや瑪瑙など当時の台湾で産しない装飾品は、交易により島外からもたらされた品物で、青銅製刀柄や漢～宋代の銅銭も発見されており、まさに台湾島と中国本土の文化的な交流と並行関係を意識できる。詳細な研究が進めば、琉球諸島や日本との交流も見いだされるかもしれない。

十三行遺跡の「十三行文化」は台湾島北部海岸部に広がったが、約500年前に消える。文化

的継承性や土器の紋様構成など考古学的データなどから、台湾島北部先住民、平埔族のケタガラン族との民族的関係が推定されている。

十三行博物館の開館

1989年に、この場所に汚水処理場建設が計画され、遺跡保存を訴える考古学者と呼応する市民の反対運動が起こった。市民運動として残念ながら、発掘後遺跡のほとんどの部分が破壊されたが、約3000㎡が汚水処理場建設計画を変更して保存されている。

1992年には博物館建設の決定がなされ、2003年に縣レベルで北台湾唯一の遺跡博物館、遺跡保存展示教育センターとして現在の十三行博物館が開館する。将来は八里左岸の環境を取り込んだ生態博物館群の中心館へと発展する計画があるという。



博物館は、「2002年度台湾建築賞第1位」を受賞した建物で、山をイメージしたコンクリート建物とクジラの背中のようなRC鋼製型枠建物を組み合わせた印象の深いレイアウトを持っており、一見して日本の有名建築家の博物館設計に似

ている。半地下の入り口を入り、階段を上ると発掘調査の再現があり、2階に二つの展示ホールを持っている。壁面に湾曲と傾斜があって意図的に四角い展示室にしていない点と、明るいミュージアム・ショップが印象的である。

今、十三行博物館は、隣接する八里汚水処理場の巨大な球形沈殿槽施設に並立して、八里郷のランドマークとなっている。

台湾と考古学博物館

台湾出身の国民党李登輝総統が1988年に就任した後に汚水処理場建設が計画され、2000年の民主党陳水扁総統就任後に十三行博物館が開館するという道筋は、台湾における市民意識、台湾人認識の高まり、経済至上主義から環境重視への舵取りと軌を一にしている。市民と研究者による遺跡保存運動の中で勝ち取られ、自然環境に一体となったコンセプトの博物館群に位置づけられたモダンな博物館は、今の台湾

社会のあり方とその地政学的位置を如実に表している。この数年、台湾島の考古遺跡の発掘が詳細に取り上げられ、さらに同じ2002年に国立台湾史前文化博物館が台東に開館したことなどは、漢族としての中国本土の歴史から台湾島の足元の歴史へと、台湾住民のアイデンティティ基盤が変化しつつある証しであろう。



十三行博物館は、中国文明圏の辺縁にある台湾島に千数百年にわたって存続した十三行文化を展示するものである。展示の中でこの文化は、台湾先住民である平埔族のケタガラン族との系譜が推定され、漢族とは異なる辺縁文化であることも強調されている。展示室に復原された服装や狩猟漁撈中心の生業と、発掘された高度な製鉄と活発な交易活動の存在から窺われる社会の姿とのギャップは、台湾史における漢族移住以前の先住民による部族社会という歴史観からであるか。中国辺縁文化圏での原始・古代からはじまる民族社会の成立、接触と移住、伝播と交易、定着・拡散のさまざまなモデルとして、日本の研究者にとっても興味深い遺跡と博物館となっている。



台北縣立十三行博物館

SHIHSANHANG MUSEUM OF ARCHAEOLOGY, TAIPEI COUNTY

台湾（中華民國）台北縣249
八里鄉博物館路200
200 BOWUGUAN RD.BALI
TAIPEI 249, TAIWAN
電話：886-2-2619-1313
E-mail：sshm@ms.tpc.gov.tw
http://www.sshm.tpc.gov.tw



台北駅よりMRT淡水線で淡水駅下車、フェリーで八里埠頭へ渡河。
バス（紅13番）乗車で十三行博物館。MRT淡水駅より約40分の行程。
月曜日休館 入館料：大人100元